日蓮大聖人御書全集

新池殿御消息

にいけどのごしょうそく

新版
2056
～
2061

新池殿御消息

弘安2年('79) 5月2日　58歳　新池殿

八木三石、送り給び候。

今、一乗妙法蓮華経の御宝前に備え奉って、南無妙法蓮華経とただ一遍唱えまいらせ候い畢わんぬ。いとおしみの御子を霊山浄土へ、「決定して疑いあることなけん」と送りまいらせんがためなり。

そもそも因果のことわりは華と果とのごとし。千里の野の枯れたる草に蛍火のごとくなる火を一つ付け

ぬれば、須臾に一草二草、十・百・千・万草につきわたりてもゆれば、十町二十町の草木一時にやけつきぬ。竜は一滴の水を手に入れて天に昇りぬれば、三千世界に雨をふらし候。小善なれども、法華経に供養しまいらせ給いぬれば、功徳かくのごとし。

仏の滅後一百年と申せしに、月氏国に阿育大王と申せし王ましましき。一閻浮提八万四千の国を四分が一御知行ありき。竜王をしたがえ、鬼神を召し仕わせ給う。六万の羅漢を師として八万四千の石塔を立て、十万億の金を仏

に供養し 奉 らんと誓わせ給いき。

かかる大王にておわせしその因位の功徳をたずぬれば、ただ土の 餅 一つ釈迦仏に供養し 奉 りし故ぞかし。

釈迦仏の伯父に斛飯王と申す王おわします。彼の王に太子あり、阿那律となづく。この太子生まれ給いしに、御器一つ持ち出でたり。彼の御器に飯あり。食すればまた出でき、また出でき、終に飯つくることなし。故に、かの太子のおさな名をば如意となづけたり。法華経にて 仏 に成り給う普明如来これなり。

この太子の因位を尋ぬれば、うえたる世にひえの飯を辟支仏と申す僧に供養せし故ぞかし。辟支仏を供養する功徳すら、かくのごとし。いわんや、法華経の行者を供養せん功徳は、無量無辺の仏を供養し進らする功徳にも勝れて候なり。

そもそも日蓮は日本国の者なり。この国は南閻浮提七千由旬の内に八万四千の国あり。その中に月氏国と申す国は大国なり。彼の国に五天竺あり。十六の大国・五百の中国・十千の小国・無量の粟散国あり。それより東海の

中に小島あり。日本国これなり。中天竺よりは十万余里の東なり。仏教は仏滅度して後、正法一千年が間は天竺にとどまりて余国にわたらず。正法一千年の末、像法に入って一十五年と申せしに、漢土へ渡る。漢土に三百年すぎて百済国に渡る。百済国に一百年、已上一千四百十五年と申せしに、人王三十代欽明天皇の御代に、日本国に始めて釈迦仏の金銅の像と一切経は渡って候いき。今、七百余年に及び候。

その間、一切経は五千余巻、あるいは七千余巻なり。宗

は八宗、九宗、十宗なり。国は六十六箇国・二つの島、神は三千余社、仏は一万余寺なり。男女よりも僧尼は半分に及べり。仏法の繁昌は、漢土にも勝れ、天竺にもまされり。

ただし、仏法に入って諍論あり。浄土宗の人々は阿弥陀仏を本尊とし、真言の人々は大日如来を本尊とす。禅宗の人々は経と仏とをば閣いて達磨を本尊とす。余宗の人々は念仏者・真言等に随えられ、いずれともなけれども、つよきに随い、多分に押されて、阿弥陀仏を本尊とせり。現在の主・師・親たる釈迦仏を閣いて、他人たる

阿弥陀仏の十万億の他国へにげ行くべきよしをねがわせ給い候。

阿弥陀仏は、親ならず、主ならず、師ならず。されば、一経の内、虚言の四十八願を立て給いたりしを、愚かなる人々実と思って、物狂わしく金・拍子をたたき、おどりはねて念仏を申し、親の国をばいといでぬ。来迎せんと約束せし阿弥陀仏の約束の人は来らず、中有のたびの空に迷って、謗法の業にひかれて三悪道と申す獄屋へおもむけば、獄卒の阿防羅刹悦びをなし、とらえからめてさいなむこと限り

なし。

これをあらあら経文に任せてかたり申せば、日本国の男女四十九億九万四千八百二十八人ましますが、某一人を不思議なる者に思って、余の四十九億九万四千八百二十七人は皆敵と成って、主・師・親の釈尊をもちいぬだに不思議なるに、かえりて、あるいはのり、あるいはうち、あるいは処を追い、あるいは讒言して流罪し死罪に行わるれば、貧なる者は富めるをへつらい、賤しき者は貴きを仰ぎ、無勢は多勢にしたがうことなれば、たまたま法華経を信ずる

なんにょしじゅうくおくくまんしせんはっぴゃくにじゅうはちにん
粗々経文に任せてかたり申せば、日本国の男女四十九億九万四千八百二十八人ましますが、某一人を不思議なる者に思って、余の四十九億九万四千八百二十七人は皆敵と成って、主・師・親の釈尊をもちいぬだに不思議なるに、かえりて、あるいはのり、あるいはうち、あるいは処を追い、あるいは讒言して流罪し死罪に行わるれば、貧なる者は富めるをへつらい、賤しき者は貴きを仰ぎ、無勢は多勢にしたがうことなれば、たまたま法華経を信ずる

ようなる人々も、世間をはばかり人を恐れて、多分は地獄へ堕つること不便なり。

ただし、日蓮が愚眼にてやあるらん、また宿習にてや候らん。「法華経は最も第一なり」「已今当説に難信難解なり」「ただ我一人のみ、能く救護をなす」と説かれて候文は如来の金言なり。あえて私の言にはあらず。

当世の人は人師の言を如来の金言と打ち思い、あるいは法華経に肩を並べて斉しと思い、あるいは勝れたり、あるいは劣るなれども機にかなえりと思えり。

しかるに、如来の聖教に随他意・随自意と申すことあり。譬えば、子の心に親の随うをば随他意と申す、親の心に子の随うをば随自意と申す。諸経は随他意なり。仏、一切衆生の心に随い給う故に。法華経は随自意なり。一切衆生を仏の心に随えたり。諸経は仏説なれども、これを信ずれば、衆生の心にて永く仏にならず。法華経は仏説なり、仏智なり。一字一点もこれを深く信ずれば、我が身即ち仏となる。

譬えば、白紙を墨に染むれば黒くなり、黒漆に白物を入

るれば白くなるがごとし。毒薬変じて薬となり、衆生変じて仏となる。故に妙法と申す。

しかるに、今の人々は、高きも賤しきも、現在の父たる釈迦仏をばかろしめて、他人の縁なき阿弥陀・大日等を重んじ奉るは、これ不孝の失にあらずや、これ謗法の人にあらずやと申せば、日本国の人一同に怨ませ給うなり。それもことわりなり。まがれる木はすなおなる縄をにくみ、いつわれる者はただしき政をば心にあわず思うなり。

我が朝、人王九十一代の間に、謀叛の人々は二十六人な

り。いわゆる、大山王子・大石小丸、乃至将門・すみとも・悪左府等なり。これらの人々は、吉野・とつ河の山林にこもり、筑紫・鎮西の海中に隠るれば、島々のえびす、浦々のものの武士打ふどもうたんとす。しかれども、それは貴き聖人、山々・寺々・社々の法師・尼、女人はいとう敵と思うこととなし。

日蓮をば、上下の男女、尼・法師、貴き聖人なんど云わるる人々は、殊に敵となり候。その故は、いずれも後世をば願えども、男女よりは僧尼こそ願う由はみえ候え。彼

らは往生はさておきぬ、今生の世をわたるなかだちとなる故なり。

智者・聖人、また「我好し」「我勝れたり」と申し、本師の跡と申し、所領と申し、名聞利養を重くしてまめやかに、道心は軽し。「仏法はひがさまに心得て、愚癡の人なり、謗法の人なり」と言をも惜しまず、人をも憚らず、「当に知るべし、この人は仏法の中の怨なり」の金言を恐れて、「我はこれ、世尊の使いなり。衆に処するに畏るるところなし」という文に任せていたくせむるあいだ、「いまだ得ざ

るを謂って得たりとなし、我慢の心は充満せん」の人々、いかでかにくみ、嫉まざらんや。

されば、日蓮程、天神七代・地神五代・人王九十余代に、いまだこれ程法華経の故に三類の敵人にあだまれたる者なきなり。

かかる上下万人一同のにくまれ者にて候に、これまで御渡り候いしこと、おぼろけの縁にはあらず。宿世の父母か昔の兄弟にておわしける故に思い付かせ給うか。また、過去に法華経の縁深くして、今度仏にならせ給うべきたね

の熟せるかの故に、在俗の身として世間ひまなき人の、公事のひまに思い出ださせ給いけるやらん。

その上、遠江国より甲州波木井郷身延山へは、道三百余里に及べり。宿々のいぶせさ、嶺に昇れば日月をいただき、谷へ下れば穴へ入るかと覚ゆ。河の水は矢を射るがごとく早し。大石ながれて人馬むかい難し。船あやうくして紙を水にひたせるがごとし。男は山がつ、女は山母のごとし。道は縄のごとくほそく、木は草のごとくしげし。

かかる所へ尋ね入らせ給いて候こと、いかなる宿習な

るらん。釈迦仏は御手を引き、帝釈は馬となり、梵王は身に
随い、日月は眼となりかわらせ給いて入らせ給いけるにや。
ありがたし、ありがたし。
事多しと申せども、このほど風おこりて身苦しく候あ
いだ、留め候い畢わんぬ。
弘安二年己卯五月二日　　日蓮　花押
新池殿御返事